

昔むかし、あるところに、王さまとお妃おひめがありました。王さまにはアンネというとても美しい娘むすめがいて、お妃にはカトリンという娘がいました。アンネとカトリンは、ほんとうのきょうだいのように愛し合っていました。

ところが、お妃は、王さまの娘のアンネが、自分の娘のカトリンより美しいのがねたましくてなりませんでした。それで、いつも、どうしたらアンネの美しさをだいなしにできるだろうかと考えていました。

ある日、お妃は、にわとりを飼かっている女の所に相談に行きました。この女は、まほう使いでした。女は、お妃にいいました。

「じゃあ、明日の朝、娘をわたしの所におよこし。ただし、娘が何か食べる前にだよ」

あくる朝早く、お妃は、アンネにいいました。

「おまえ、谷間のにわとりを飼っている女の所に行って、卵をいくつか分けてくださいとたのんでおいで」

アンネは出かけて行きました。台所を通ったとき、アンネは、パンの皮をつまんで、かじりながら歩いて行きました。

にわとりを飼っている女の所に着くと、アンネは、いいつけられたとおり、

「卵をいくつか分けてください」とたのみました。女は、

「ここにある、このつぼのふたを取って、何が起こるか見てごらん」といいました。アンネは、つぼのふたを取りましたが、何も起こりませんでした。女は、

「帰ってお母さんにいうんだよ。食料部屋の戸をよく閉めておくようにとね」といいました。

アンネは、家に帰ると、お妃に、

「おばさんが、食料部屋の戸をよく閉めておくようにって」と伝えました。そこで、お妃は、アンネが何か食べて行ったことが分かりました。

あくる朝、お妃はよく気をつけて、アンネに何も食べさせないで、にわとりを飼っている女の所に行かせました。

アンネが歩いていると、村の人たちが、畑でえんどう豆をつんでいました。アンネが、あいさつをすると、村の人たちは、えんどう豆をひとつかみくれました。アンネは、えんどう

豆を食べながら、女の所へ行きました。

女は、

「このつぼのふたを取って、何が起こるか見てごらん」といいました。アンネは、つぼのふたを取りましたが、何も起こりませんでした。女は、すっかり腹を立てていいました。

「帰って、お母さんにいうんだよ。火が消えているときは、つぼは煮えたりしないとね」

アンネは、家に帰ると、お妃に、

「おばさんが、火が消えているときは、つぼは煮えたりしないよって」と伝えました。

あくる朝、お妃は、自分でアンネを女の所へ連れて行きました。

女は、アンネに、

「このつぼのふたを取って、何が起こるか見てごらん」といいました。アンネは、つぼのふたを取りました。そのとたん、アンネの頭が落ちて、かわりに、羊の頭がさっと乗っかりました。お妃は、満足して、アンネを連れて帰りました。

カトリンは、アンネとふたりきりになると、アンネの羊の頭に上等のリンネルの布を巻いてかくしました。それから、ふたりは手を取りあつてお城を出、<sup>しあわ</sup>幸せを探しに出かけました。

ふたりは、どンドン、どンドン歩いて行きました。やがて、大きな屋敷<sup>やしき</sup>に着きました。カ

トリンは、戸をトントンとたたいて、

「どうか、わたしと、病気の姉さんを泊めてください」とたのみました。中に入ると、それは、ある王さまのお城だと分かりました。

王さまには、王子さまがふたりありました。下の王子さまは、重い病気でしたが、どこが悪いのかだれにもわかりませんでした。しかも、ふしぎなことに、夜、王子さまの看病をした者は、朝になるといなくなっていたのでした。そこで、王さまは、

「ひと晩じゅう、寝<sup>ね</sup>ないで看病できた者には銀貨を一枚やろう」と約束しました。

カトリンは、これを聞くと、

「わたしが、王子さまのそばにすわって、ずっと起きていましょう」と申し出ました。

夜中になりました。時計が十二時を打つと、王子さまは、ベッドから起きあがり、服を着て階段をおりて行きました。カトリンは、こっそり王子さまのあとをつけて行きました。王子さまは、うまやに行つて、馬にくらを置いてとび乗りました。カトリンは、王子さまの後ろにひらりととび乗りました。馬は走りだしました。

馬は、森をぬけて進んで行きました。とちゅうで、カトリンはくるみをつみ取って、エプロンにつめました。馬は、どンドン進んで行って、とうとうみどりの丘おかにやって来ました。王子さまは馬を止めて、いいました。

「ひらけ、ひらけ、みどりの丘よ。若い王子と馬を入れてくれ」

カトリンは、そっと、

「それから後ろの女の人も」とつけくわえました。

すぐに、みどりの丘はひらきました。ふたりは、中へ入りました。王子さまは、明るい大広間に入っていきます。カトリンが、とびらのかげから見ると、大広間には、おおぜいの美しい妖精ようせいたちがいて、王子さまをダンスにさそっていました。王子さまは、踊って、踊って、もう踊れなくなるまで踊りつづけました。王子さまが疲れて、長いすの上に倒れこむと、妖精たちは、また踊れるようになるまで、王子さまを扇おうちであおぎました。

やがて、おんどりが鳴きました。王子さまは大急ぎで馬に乗りました。カトリンはその後ろにとび乗って、ふたりはお城に帰って行きました。

朝日がのぼると、王さまの家来けらいたちが、王子さまの寝室にやって来ました。カトリンは、暖炉だんろのそばに座すわって、くるみをパチリと割っていました。そして、

「王子さまは、夜じゅうお元気でしたよ。もし金貨を一枚くださるなら、今夜も起きていましょう」といいました。

二日目の晩も、同じことが起こりました。

時計が十二時を打つと、王子さまは、起きあがり、妖精の舞踏会ぶとうかいへと馬を走らせました。

カトリンは、森をぬけて行くとき、くるみをつみ取って、エプロンにつめました。みどりの丘に着くと、王子さまは馬を止めて、いいました。

「ひらけ、ひらけ、みどりの丘よ。若い王子と馬を入れてくれ」

「それから後ろの女の人も」と、カトリンはつけくわえました。

すぐに、みどりの丘はひらきました。王子さまは、大広間に入っていく、妖精たちが、王子さまをダンスにさそいました。カトリンは、王子さまが今夜も踊りつづけると分かっていたので、気をつけて見てはいませんでした。かわりに、ひとりの妖精の子どもが、まほうのついで遊んでいるのを見つけました。そばにいた妖精が、

「あのついで三回打てば、カトリンの病気の姉さんは、もとおりがきれいになるのにねえ」

といました。

カトリンは、くるみを取り出して、妖精の子どものほうへ転がしました。子どもは、くるみを追いかけてちよこちよこ歩いて行きました。カトリンは、くるみをどんどん転がしました。子どもはくるみを追いかけているうちに、つえを落としてしまいました。カトリンは、つえをひろいあげて、エプロンの下にかくしました。

やがておんとりが鳴くと、王子さまとカトリンは、馬で帰って行きました。

帰り着くとすぐにカトリンは、自分の部屋に行きました。そして、まほうのつえで、アンネを三回打ちました。すると、いやらしい羊の頭が落ちて、もどおり、美しいアンネになりました。

それから、カトリンは、王子さまの寝室で、くるみをパチリと割っていました。

朝日がのぼると、カトリンは、王さまの家来たちに行きました。

「王子さまは夜じゅうお元気でしたよ。もし王子さまと結婚けっこんさせてくださるなら、今夜も起きていきましょう」

王さまは、約束やくそくしました。

三日目の晩、時計が十二時を打つと、王子さまは、妖精の舞踏会へと馬を走らせました。

カトリンは、森をぬけて行くとき、くるみをつみ取って、エプロンにつめました。みどりの丘に着くと、王子さまは馬を止めて、いいました。

「ひらけ、ひらけ、みどりの丘よ。若い王子と馬を入れてくれ」

「それから後ろの女の人も」と、カトリンは、つけくわえました。

すぐに、みどりの丘はひらきました。王子さまは、大広間に入っていき、妖精たちが、王子さまをダンスにさそいました。カトリンは、今度は、妖精の子どもが小鳥と遊んでいるのを見ました。そばにいた妖精が、

「あの小鳥を三口食べれば、王子さまは、もどどおりに元気になるのにねえ」といいました。

カトリンは、くるみを取り出して、妖精の子どものほうへ転がしました。子どもは、くるみを追いかけてちよこちよこ歩いて行きました。カトリンは、ありったけのくるみを転がしました。子どもはくるみを追いかけているうちに、小鳥を落としてしまいました。カトリンは、小鳥をエプロンの下にかくしました。

やがておんとりが鳴くと、王子さまとカトリンは、馬で帰って行きました。

帰り着くとカトリンは、小鳥の羽をむしって料理しました。王子さまの寝室に、とてもいいにおいが立ちこめました。王子さまは、ベッドの中から、

「ああ、その小鳥をひと口食べたいなあ」といいました。カトリンは、小鳥をひと口、王子さまに食べさせました。王子さまは、ひじについて体を起こしました。そして、

「ああ、その小鳥をもうひと口食べたいなあ」といいました。カトリンは、もうひと口食べさせました。王子さまは、座って、

「ああ、もうひと口食べたいなあ」といいました。カトリンは、三口目を食べさせました。すると、王子さまは元気にベッドから立ち上がりました。

朝日がのぼって、家来たちが寝室に入って来たとき、カトリンと王子さまは、いっしょにくるみをパチリと割っていました。

ところで、上の王子さまは、アンネを見てひと目で好きになりました。そこで、病気だった王子さまは元気な妹と結婚し、元気な王子さまは病気だった姉と結婚しました。

みんなは、死ぬまで幸せに満足して暮らしました。もう苦しい目にあうことはありませんでしたとき。

村上郁再話

資料『世界の民話6 イギリス』川端豊彦訳／ぎょうせい